

## フィールドに入る、フィールドを広げる

企画担当 江口正 (福岡大学)  
高田三枝子 (愛知学院大学)

## 趣旨

近年の日本語研究のひとつの流れとして、理論研究者や文献研究者など、「フィールド調査」に重点を置いてこなかった研究スタイルの研究者がフィールドに入り、調査を通じて自らの研究フィールドを広げてきていることが挙げられます。本シンポジウムはその流れを振り返り、今後の日本語研究の方向性と可能性をはかろうとするものです。

日本の理論言語学的研究は、西洋の理論・西洋語の分析法を取り入れ、それを日本語に適用させるという形で発展してきました。そこで適用される「日本語」は現代中央語であり、研究者の言語直観を生かして内省を重ねることで詳細なデータを得ていました。その結果、西洋語と日本語との対照研究が進み、理論から見た日本語の特質について理解が深まってきたという流れがあります。

現代中央語の理論的・記述的文法研究が描き出してきた研究成果が古典語文法研究者にも影響を与えてきたことは本学会 2019 年度のシンポジウムでも議論されたところです。それは方言文法の研究でも同様でしたが、中央語の研究成果を方言研究に利用することによってその成果だけではわからない諸カテゴリーの特質がかえって明らかになり、それを解決しようとするのが近年の研究の進展を促してきました。アスペクト研究がその代表です。そういう流れをきっかけとして、理論的研究者が方言の類型的変異に目を向け、その説明法を探るためにフィールドに入るようになってきました。

音韻、特にアクセントの研究は、中央語だけでなく方言差や時代差を主要な研究対象としてきましたが、細かいバリエーションを扱う関係上、日本語内部の目に見える変異に注意が向けられやすかった部分があります。一方理論研究では、諸外国語から日本語諸方言まで考慮する関係から、モデル化しなければ見えてこない共通性のほうに注意が向けられてきました。直接フィールドに関わった理論研究者の研究成果には、方言研究者が目を向けなかった事象に光を当て、思いもよらぬ一般化につながるものがあり、それが近年の記述的研究の発展につながってきています。

通時的な研究志向を持つ文献研究者にとって、方言文法のバリエーションは「ありえた変化」の姿として新鮮な興味の対象となっています。『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』は、理論研究者、文献研究者がフィールドに入り、方言研究者と協同して研究した成果であり、詳細な記述的事実の整理に理論的な説明、通時的な説明が加わることによって研究に厚みが増しています。この研究に限らず、多くの若手文献研究者がフィールド研究に直接携わることで自らの文献研究のフィールドを広げてきています。

こういった研究の流れは、様々なバックグラウンドを持つ研究者がプロジェクトを通して協同して研究を進めるという新たなスタイルを生んでいます。危機言語としての方言の記述の重要性、若手研究者人口の減少、現地調査が難しくなっている現状など、現在の研究には課題がいくつもありますが、オンラインでの情報交換を進めながら様々なタイプの研究者と協同して研究フィールドの幅を広げていくことが本学会にとっても今後の重要な道筋の一つになるものと思われます。

本シンポジウムでは、フィールドに入ることによって研究の幅を広げてきた理論研究者お二人と文献研究者お一人に登壇いただき、これまでのことを振り返りつつ今後の研究の在り方について考えていきたいと思います。

パネリスト	窪 蘭 晴夫（国立国語研究所）
	有田 節子（立命館大学）
	久保 蘭 愛（愛知県立大学）
司会	江口 正（福岡大学）
コメンテーター	高田 三枝子（愛知学院大学）

# 一般言語学から見た日本語のプロソディー

窪蘭晴夫 (Haruo KUBOZONO)

国立国語研究所

## 1. はじめに

日本語は世界の言語の中でも「アクセントの宝庫」と言われるほどに多様なアクセント体系を有する。イントネーションまで含めると、次のようなプロソディーの多様性が報告されている (窪蘭 2021)。いずれも一般言語学では言語間の差異として観察される特徴が、日本語という単一の言語の中に見られるのである。

- (1) a. アクセント型の数やタイプが方言ごとに大きく異なる。
- b. アクセントの実現領域が「語」である方言と「文節」である方言があり、さらに両者をミックスしたハイブリッド体系もある。
- c. モーラ (mora) を基調とする体系と音節 (syllable) を基調とする体系が共存し、さらにモーラと音節のハイブリッド体系も存在する。
- d. 際立ちの位置を語頭から計算する方言、語末から計算する方言、そして両者のハイブリッド体系が存在する。
- e. (ゲルマン系言語のように) 複合語のアクセント規則が語頭要素によって決まる左側優位の方言と、(ロマンス系言語のように) 語末要素によって決まる右側優位の方言、そして両者の性格を併せ持つハイブリッド体系が観察される。
- f. ピッチの下降を弁別的とする体系と、ピッチ上昇を弁別的とする体系の両タイプが存在する。
- g. ピッチの山 (基底の High tone) を 1 つ持つ単起伏体系 (one-peak system) だけでなく、山を 2 つ持つ重起伏体系 (two-peak system) も存在する。
- h. 疑問文を文末ピッチ上昇で表す方言もあれば、文末ピッチ下降で表す方言もある。

一般言語学から見ると驚異的な多様性である。日本語諸方言が示すこの多様性を一般言語学の知見がどのように説明してくれるのか、またそれとは逆に、日本語の多様性が一般言語学にどのような示唆を与えるのか。この双方向の視点が必要とされている。紙幅の関係から、本発表では(1c)の「モーラ」と「音節」に焦点を絞り、日本語の多様性を一般言語学の知識がどのように説明してくれるかという問題と、その多様性が持つ一般言語学的な意味を検討する (音節構造に関する問題については参考文献欄前の「補遺」を参照)。

## 2. 音節とモーラの類型

音韻分析では基本的な単位として音節とモーラの 2 つがよく用いられるが、アクセント体系の類型にこの 2 つの概念を取り入れたのが McCawley (1978) である。この研究では、距離や長さを測る単位 (counting unit) とアクセントを担う単位 (accent bearing unit) という 2 つの概念を区別し、表 1 のような 2x2 の類型を提案した。ちなみに後者の「アクセントを担う単位」は、声調言語の分析において「声調を担う単位」(tone bearing unit: TBU) と呼ばれている概念に相当する。

表1 McCawley (1978) の類型

アクセントを担う単位 距離・長さを測る単位	音節	モーラ
音節	ポーランド語	ベジャ語 (スーダン)
モーラ	日本語 ラテン語	リトアニア語

表1の「日本語」は東京方言を指しているが、分析の対象を方言にまで広げると表2のような結果となる。同じ日本語という言語でありながら、九州西南部の二型アクセント体系に属する3つの方言を加えただけで、このような類型上の多様性が見て取れるのである。

表2 日本語方言の多様性

アクセントを担う単位 距離・長さを測る単位	音節	モーラ
音節	ポーランド語 <u>鹿児島方言</u>	ベジャ語 (スーダン)
モーラ	<u>東京方言、甕島方言</u> ラテン語	リトアニア語 <u>長崎方言</u>

アクセントの計算においてポーランド語のような方言体系もある一方で、ラテン語のような体系もあり、リトアニア語タイプの体系も存在する。日本語という言語にこのような多様性が見られること自体、一般言語学から見ると驚異的な事実である。加えて、九州西南部の比較的均一で狭い方言地域にこのような多様性が見られるということはさらに驚くべき事実である。3方言間の違いを規則としてとらえたのが(2)~(4)であり、その違いをA型の語彙で例示したのが表3である ([のマークはピッチの上昇位置を、]はピッチの下降位置を、またドットは音節境界を示す)。

(2) 鹿児島方言 (平山 1951、木部 2000)

- a. A型 語末から数えて2つ目の音節が高くなる。
- b. B型 語末音節が高くなる。

(3) 長崎方言

- a. A型 語頭の2つのモーラが高くなる (坂口 2001)  
語頭から数えて2つ目のモーラが高くなる (松浦 2014)  
(2モーラ語は語頭が高くなる)
- b. B型 語末モーラが高くなる (坂口 2001)。  
語頭から語末にかけて緩やかにピッチが上昇する (松浦 2014)

(4) 甕島方言 (上村 1937, 1941; 窪田 2012, 2016)

- a. 語末から数えて2つ目のモーラが高くなる。
- b. 語末モーラが高くなる。

表3 3姉妹方言の比較 (A型語彙)

語彙	長崎方言	甕島 (平良) 方言	鹿児島方言
オ.バ.マ	オ[バ]マ	オ[バ]マ	オ[バ]マ
カー.ター	カ[ー]ター	カー[タ]ー	[カー]ター
バイ.デン	バ[イ]デン	バイ[デ]ン	[バイ]デン
ト.ラン.プ	ト[ラ]ンプ	ト[ラン]プ	ト[ラン]プ

表3の例からも分かるように、長崎方言のA型は自立拍、特殊拍の違いに関係なく、「語頭から2モーラ目」が高くなるため（ここでは松浦 2014の解釈に従う）、アクセント（高音調）を「モーラで数えて、モーラで担う」体系ということになる。一方、鹿児島方言は一律に「語末から2つ目の音節」が高くなるから「音節で数えて、音節で担う」体系—柴田 (1962)が「シラビーム方言」と呼んだ体系—と言える。甕島（平良）方言のA型は「語末から2つ目のモーラ」が高くなることから、鹿児島方言のモーラ版と呼ぶことができる。

### 3. 一般言語学からの知見

計算の方向性（語頭から／語末から）を除くと、甕島方言は長崎方言と同じくモーラで数えて、モーラが高くなる体系のように見えるが、実際にはそうではない。表3の「トランプ」の例からも分かるように、語末から2つ目のモーラが特殊拍の場合には、その音節全体が高く発音される。これはB型の語彙にも見られるもので、(5)のように共時的な高音調拡張規則として表すことができる（窪田 2012, 2021）。

#### (5) 甕島（平良方言）の高音調拡張規則

##### a. A型

ト.ラ[ン].プ → ト.[ラン].プ

##### b. B型

ミ.カ[ン] → ミ.[カン]（蜜柑）

(5)の規則ゆえに、甕島方言は東京方言と同じように「アクセントをモーラで数え、音節で担う」というタイプの言語に分類されるのであるが、ここで問題となるのが、長崎・鹿児島・甕島という姉妹方言間の差異が、どのようにして生じたのかということである。モーラと音節の両方を用いるという点では、甕島方言はモーラ基調の長崎方言と音節基調の鹿児島方言の中間的な特徴を持っており、体系の変化を探る上で鍵となる。歴史的な変遷としては次の2つの仮説が考えられる。

#### (6) a. 長崎（モーラ）→ 甕島（モーラ+音節）→ 鹿児島（音節）のように体系が変化した。

#### b. 逆方向に、音節体系 → モーラ+音節体系 → モーラ体系の変化が起こった。

もし(6b)が実証できれば、九州西南部二型アクセント体系の祖型は現在の鹿児島方言のような音節基調の体系（シラビーム体系）であったということになり、古い体系が鹿児島に残っているということになる（この論を拡張すると、日本語の祖語がシラビーム体系であったという可能性すら出てくる）。しかしながら、一般言語学の立場から見るとこの可能性は低い。なぜならば、(6b)の仮説は(7)のような変化を含意するが、このような変化は他の言語では報告されていない。

#### (7) 音節からモーラへの仮想変化

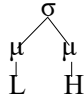
##### a. [バイ]デン → バイ[デ]ン

##### b. ト[ラン]プ → トラ[ン]プ

一方、(6a)の仮説は一般言語学的にみると蓋然性が高い。なぜなら、モーラ体系に音節性が生じる(5)の規則が、アフリカの声調言語などでごく普通に観察されるからである(Hyman 2007)。この規則は通言語的に有標とされる(8)の構造を避けるために生じると考えられており、「重音節の中で、音韻的に弱い2モーラ目だけが音調的に強い高音調を担う」という不自然な構造を避けるために生じるとされるものである。日本語流に言うと「特殊拍だけに際立ち（高音調）が付与される構造」を忌避する規則と言える。ちなみに (8)の有標構造を避けるもう一つの方法は、重音節内で高音調を

1つ前のモーラ（つまり自立拍）に移動させる規則である。これは東京方言（ロ[ン]ドン → [ロ]ンドン）や甑島の他の方言（トラ[ン]プ → ト[ラ]ンプ）に観察される（窪菌 2012, 2016, 窪菌他 2016）。

(8) 有標な構造（曲線音調）



このように、長崎方言のようなモーラ基調の体系から甑島方言のような「モーラ+音節」のハイブリッド体系が生じるのは一般言語的に説明がつく。残る問題は、このハイブリッド体系から現在の鹿児島方言のような完全な音節体系（シラビーム体系）が生じる過程であるが、これは現在の甑島（平良）方言と鹿児島方言の異同を詳細に観察すると分かるようになる。表4のように甑島・鹿児島祖語を完全にモーラ的な体系と仮定すると、この体系に(5)の規則（表4の太字部分）が加わっただけで全体の6/8がシラビーム体系と同じになる。具体的には、現在の甑島（平良）方言と鹿児島方言はA型の重音節で終わる語（「ハワイ」と「バイデン」のタイプ）のアクセントだけが異なるだけである。

表4 甑島（平良）方言と鹿児島方言の異同（重＝重音節、軽＝軽音節）

	語末2音節の構造	甑島・鹿児島祖語	甑島（平良）方言	鹿児島方言
A型	...軽+軽	オ[バ]マ	オ[バ]マ	オ[バ]マ
	...重+軽	トラ[ン]プ	<b>ト[ラ]ン</b> プ	ト[ラン]プ
	...軽+重	ハ[ワ]イ	ハ[ワ]イ	[ハ]ワイ
	...重+重	バイ[デ]ン	バイ[デ]ン	[バイ]デン
B型	...軽+軽	オト[コ]	オト[コ]	オト[コ]
	...重+軽	リン[ゴ]	リン[ゴ]	リン[ゴ]
	...軽+重	ミカ[ン]	<b>ミ[カ]</b> ン	ミ[カン]
	...重+重	ニッポ[ン]	<b>ニッ[ポ]</b> ン	ニッ[ボン]

このように甑島（平良）方言は、共時的に見ると「(5)の調整規則を持つモーラ主体の体系」であり、特定の条件下で結果的に音節単位のアクセント付与が行われているのであるが、通時的には限りなく「音節で数える体系」になっている。「特定の条件下で音節が用いられる」というその「条件」が外れると、現在の鹿児島方言が生まれる。つまり、言語獲得期に小規模な再分析(reanalysis)が起これば残る2/8も音節単位の構造となり、「モーラ+(5)の調整規則」という甑島（平良）の体系から音節主体の体系—現在の鹿児島方言—が成立するのである。

このように一般言語学の観点から見るとモーラ体系から音節体系へ変化(6a)が無理なく説明できるようになる一方で、これとは逆方向の(6b)の仮説は説明がむずかしい。鹿児島方言のようなシラビーム体系から甑島（平良）方言のようなハイブリッド体系への変化—たとえば(7a)—を説明することはむずかしく、さらにこのハイブリッド体系からモーラ基調体系への変化—たとえば(7b)—を説明することもむずかしい。このようは変化には一般的な動機が見つからないのである。

#### 4. 一般言語学への知見

以上の議論をまとめると、鹿児島方言はもともとシラビーム方言だったのではなく、モーラを基調とする体系から少なくとも2段階の変化を経て、現在の音節を基調とする体系に発展してきたと考えることが妥当となる。その鍵となるのが、1つには表4に示した現在の甑島（平良）方言との類似性であり、もう1つが一般的な有標構造(8)と、その有標性を解消しようとして起こる(5)の変化

である。(5)の高音調拡張現象がアフリカの言語などに広範囲に観察されることを考えると、この現象によってモーラ一辺倒の体系（鹿児島・甕島祖語）に音節性が発生し、結果的にモーラを基調としながら音節にも依存する体系—現在の甕島（平良）方言の体系—が生み出されたと推測できる。さらに言語獲得時における再分析によって、この平良方言の体系から音節を基調とする体系—現在の鹿児島方言—が生み出されたと考えられる。

この分析は、姉妹方言である長崎方言がほぼ完全なモーラ方言であるという共時的な事実や、甕島方言において過去80年間に音節の役割が強化されてきたという通時的な事実（窪田 2021）とも符合する。

日本語全体で考えると、現在の鹿児島方言のシラビーム体系を根拠に、「日本語祖語はシラビーム方言であり、その祖型が現在の鹿児島方言に残っている」という議論は成り立たなくなる。現在の鹿児島方言が持つシラビーム体系は、日本語祖語がモーラ言語だったのか音節言語だったのかという問題とは直接関係しない。つまり、モーラ体系から音節体系への変化が起こったという本稿の主張は、日本語祖語がモーラ言語であったという仮説を直接支持するものでもなく、また日本語祖語が音節言語であった可能性を完全に否定するものでもない。

本節の分析は、モーラと音節をめぐる一般言語学の研究にも重要な知見を与えてくれる。通言語的には、同一の言語の中にモーラ主体の体系と音節主体の体系が存在しているという事実自体（表2）が興味深いことであるが、本節の分析は、モーラ主体の体系から音節主体の体系へという質的な変化が一般に考えられているよりも容易に、かつ比較的短期間に起こりうることを示唆している。この知見は、モーラと音節が同一の体系内で共存できるという近年の研究成果とも符合するところが大きい。

### 補遺（3モーラ音節忌避の制約）

日本語の方言研究はブロンディー以外の領域においても一般言語学に貢献するところが大きい。たとえば英語やラテン語などの研究では3モーラの音節（超重音節）を忌避する傾向が以前より指摘されており（Ármason 1980）、それが世界中の言語に広範囲に見られることがわかるようになり、現在の音韻理論では一般的な制約(9)として取り入れられている（Prince & Smolensky 2004）。西欧の言語においてはこの制約は(9)の閉音節短母音化(9)という現象として現れる。英語の keep—kept, go—gone などのペアに見られる長短母音の違いを作り出したのがこの現象である。

(9) 3モーラの音節は言語一般に忌避される(trimoraic syllable ban)

(10) 閉音節短母音化

a. ラテン語 : steel.la → stel.la（星）

b. 英語 : good spell → godspell ‘godspell’, keep.te → kep.te ‘kept’, goon → gon ‘gone’

日本語はもともと単一形態素内に「カーン」や「タイン」のような3モーラの連続を許容しない言語であるため、上記の制約とは無関係なように思われがちであるが実際にはそうではない。このような音連続を含む語が他の言語から入ってくる際に、複数の方法で3モーラ音節の生成を避けようとする。東京方言であれば(11)の3つの方策、鹿児島方言であれば(12)の3つの方策でこの有標な音節構造を避けようとする（Kubozono 2018）。このうち(11b)と(12b)は(10)と同じ現象である。

(11) a. 促音添加規則の阻止

cut → カット ; cart → カート、\*カーツ

b. 撥音の前の短母音化

change → チェンジ、\*?チェインジ ; stainless → ステンレス、\*ステインレス

c. 音節構造の調整（再音節化）

ライン → ラ.イン ; リンカーン → リン.カ.ーン

(12) a. 「の」の短縮規則の阻止

トナリノ (隣の) → トナリン; トナイノ (隣の) → \*トナイン

b. 撥音の前の短母音化

東京の... → トーキョン、\*トーキョーン、\*トーキョノ

c. 音節構造の調整 (再音節化)

ライン → ラ.イ; リンカーン → リン.カ.ーン

(11a-c), (12a-c) にあげた現象は一見するとお互いに無関係なように思えるが、すべて(9)の制約で説明できる。つまり(9)の制約が日本語にも働いていることがわかる。この制約を想定することにより、日本語内で無関係に見える複数の現象を一般化することができるようになるだけでなく、日本語を世界の諸言語と同じ土俵で分析することができるようになり、よって(10)などの現象とも一般化できるようになるのである。(鹿児島方言にモーラという概念が不可欠であるという知見も得られる)。

以上が一般言語学から日本語を分析した時に得られる知見であるが、これとは逆に、日本語の研究も一般言語学に重要な知見を与える。(11)-(12)の現象は、(9)の制約が(10)のような閉音節短母音化という現象だけでなく複数の現象によって達成できることを示している。(9)の制約が単一の言語において複数の現象となって現れてくるという知見が、日本語の研究が一般言語学に貢献できる一面である(窪田 2021)。

## 謝辞

本発表は JSPS 科研費 19H00530, 20H05617 と、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」および「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」による研究成果の一部を報告したものである。

## 参考文献

- Árnason, Kristian (1980) *Quantity in Historical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』 学界之指針社。
- Hyman, Larry M. (2007) Universals of tone rules: 30 years later. In Riad, T. and C. Gussenhoven (eds.), *Tones and Tunes, Vol. 1: Typological Studies in Word and Sentence prosody*. 1-34. Mouton de Gruyter.
- 上村孝二 (1937) 「甌島方言の研究」『満鐵教育研究所研究要報』 11: 319-348.
- 上村孝二 (1941) 「甌島方言のアクセント」『音声学協会会報』 65-66: 12-15.
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』 勉誠出版。
- 窪田晴夫 (2012) 「鹿児島県甌島方言のアクセント」『音声研究』 16(1): 93-104.
- Kubozono, Haruo. (2016) Diversity of pitch accent systems in Koshikijima Japanese. 『言語研究』 150: 1-31.
- Kubozono, Haruo (2018) Mora sensitivity in Kagoshima Japanese: Evidence from *no* contraction. In Ryan Bennett et al. (eds.) *Hana-bana: A Festschrift for Junko Ito and Armin Mester* (online). <https://itomestercelebration.sites.ucsc.edu/>
- 窪田晴夫 (2021) 『一般言語学から見た日本語のプロソディー —鹿児島方言を中心に—』 くろしお出版。
- 窪田晴夫他 (2016) 甌島方言アクセントデータベース。 <http://koshikijima.ninjal.ac.jp/>
- 松浦年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』 ひつじ書房。
- McCawley, James D. (1978) What is a tone language? In Victoria Fromkin (ed.) *Tone: A Linguistic Survey*, 113-131. New York: Academic Press.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (2004) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Oxford: Blackwell.
- 坂口至 (2001) 「長崎方言のアクセント」『音声研究』 5(3): 33-41.
- 柴田武 (1962) 「音韻」国語学会 (編) 『方言学概説』 武蔵野書院。



# 日本語条件文の意味論・語用論 -九州方言調査から見てきたこと-

有田節子(Setsuko ARITA)

立命館大学

## 1. はじめに -方言調査に出かける前に抱えていたこと-

日本語標準語には順接仮定条件（以後「条件文」）を表す基本的な形式が複数あり<sup>1</sup>、日本語文法研究では、その形式間の異同が問題にされてきた。条件節(以後「前件」)と主節(以後「後件」)の事態間の関係のあり方(I)によって説明するもの(益岡 2013 など)、前件と後件の事実性の観点(II)から記述するもの(前田 2009 など)、さらに、日本語教育文法の立場から、異同の詳しい説明よりも教授項目の簡素化を重視する提案(III)など(庵 2017 など)様々な立場がある。いずれの立場においても、「後件のモダリティ制約」と言われる、後件に命令や依頼など直接的な働きかけが表される場合に、トが現れず、バが現れにくく、タラにはこのような制約がないという現象、そして、ナラのみが使われる特別な場合があるなど個々の条件形式の異同が日本語文法内部の問題として捉えられている。

発表者は有田(2007)で、「既定性 (settledness)」という概念で条件文を捉え直すことを提案した。既定性は、「発話時点において真偽が定まっている」という意味的特性で、日本語に限らず、条件文の意味分類において鍵となる概念であるが、日本語(標準語)の文法記述や、日本語教育のための文法では、既定性という概念(の重要性)は浸透していない。

## 2. 条件文の意味論的・語用論的研究-フィールド研究をはじめたきっかけ-

日本語に限らず、自然言語の条件文(p ならば q)を話し手が(厳密には)真偽を知らない前件 p が成立したと仮定した場合に、後件 q が成立することを明示的に述べる文と定義しておく。条件文の意味論的研究では、後件のモダリティが解釈される基盤を前件が制限(restrict)すると規定されている(Kratzer 1986 など)。(1)を例にとると、「だろう」は「台風がくる」が成立する世界の集合(fとする)で、乗組員の安全やこれまでの台風の事例など(gとする)を考慮して、「船は出ない」に対して下された判断ということになる。それを(2)のように表すことにする(Condoravdi & Lauer (2016:5)を援用)。

(1) 台風がくれば、船は出ないだろう。

$\psi$  if  $\phi$  MODAL

(2)  $\text{MODAL}_{f,g}[\psi][\phi]$

条件文の後件に「だろう」のようなモダリティ形式が常に現れるわけではない。述語で言い切られている文に必然性を表す非明示的なモダリティ(NEC とする)が隠れているとする。

(3) 台風がくれば、船は出ない。

(4)  $\text{NEC}_{f,g}[\psi][\phi]$

「話し手が真偽を知らない前件」というとき、2つの場合がある(Funk 1985)。1つは、発話の時点で前件が成立するかどうかは誰にとっても知り得ないから話し手も知らないという場合である。たとえば、「明日台風がくるかどうか」は今の時点では誰も知り得ない。もう1つは、前件が成立しているかどうかは発話時点で決定しているが、それを話し手が発話の時点で知らない場合である。たとえば、発話時が3月15日21時だとしよう。この時

<sup>1</sup> 基本条件形 (kak-e-ba) (「バ」)、基本形 (kak-u) + 接続助詞-to (「ト」)、タ系条件形 (ka-i-tara (-ba)) (「タラ」)、{ 基本形 kak-u / タ形 kak-i-ta } + 断定辞の条件形 (-nara (-ba)) (「ナラ」)

間には「大相撲春場所」の2日目に貴景勝が勝ったかどうかはとっくに決まっている。しかし、話し手がまだニュースを見ておらず、結果を知らない。このとき、成立しているかどうか(貴景勝が勝ったかどうか)が発話時点で既に決まっているという性質を「**既定性**」と呼ぶ。

条件文は、前件の**既定性**と**話し手の事実認識**(話し手が既定の命題の真偽を知っているかどうか)によって分類でき、日本語では条件節の時制節性(後述)が関わる。

表1 日本語条件文の分類 (有田 2017)

	予測的条件文	総称的条件文	事実的条件文	反事実的条件文	認識的条件文
<b>既定性</b>	—		—/+	+	+
<b>話し手の真偽に対する認識</b>	/		既知	既知	未知
<b>時制節性</b>			不完全	不完全/完全	完全

・予測的条件文…前件が発話時以降に成立した(**—既定**)と仮定して後件が成立することを予測して述べる条件文。「明日雨が降れば、試合は中止になるだろう。」

・認識的条件文…発話時点で真偽が定まっている(**+既定**)が、話し手がその真偽を知らない(**未知**)ような事態について、それが成立したと仮定して、後件に話し手の判断や態度を述べる条件文。「お隣に泥棒が入ったんなら、うちも気をつけないといけないね。」

・反事実的条件文…成立しなかった(**+既定**)ことを話し手が知っている(または信じている)(**既知**)ような前件が成立したと仮定して後件が成立することを述べる条件文。「あの日試験を受けていたなら、留年せずにすんだだろうに。」

・総称的条件文…前件と後件の関係が一般的・習慣的であるような条件文。「この薬を飲めば気分がよくなる。」「小学生の頃は、放課後になると外で遊び回ったものだ。」

・事実的条件文…前件も後件も事実であるような条件文(**+既定**)(**既知**)。「部屋に入ったら、猫がすやすやと寝ていた。」

### 九州方言を調査しようと思ったきっかけ

条件文の意味論的研究において、前件の機能は後件のモダリティの解釈基盤を制限するものとされている。佐賀を中心に九州にのみ分布する「ギー」は、その**制限・限界**の語に由来する(藤田 2003)ことを知り、調査に出かけた。

## 3. 認識的条件文の重要性

### 3.1 佐賀方言の条件節における既定性

佐賀方言において、ギーは基本形にもタ形にも接続する。佐賀方言には標準語のナラに相当するナイ(バ)という方言形式があり、この形式は、ナラ同様、基本形にもタ形にも接続する。すなわち、佐賀は基本形+ギー/タ形+ギー/基本形+ナイ(バ)/タ形+ナイ(バ)の条件形式2種×時制形式2種の4種の対立がある地域と言える。標準語では、時制形式の対立があるかないかで、(ノ)ナラと他の3つの形式が明確に区別される。有田(2007)では、時制形式の対立のある節を完全時制節、対立のない節を不完全時制節と呼び、発話時点で真偽が定まっていることを前提にして条件を述べる認識的条件文には完全時制節を導く(ノ)ナラが優先的に選ばれることを論じた。

表2 標準語と佐賀方言の条件体系

	標準語の基本条件形式	佐賀方言の基本条件形式	時制節性
<b>時制形式の対立あり</b>	(ノ)ナラ	ナイ(バ)、ギー	完全時制節
<b>時制形式の対立なし</b>	バ、タラ、ト	/	不完全時制節

佐賀東部方言の条件形式の4種の対立は概ね表3のようにまとめられる。認識的条件文

は基本的にはナイ（バ）というナラ相当の形式によって表されることがわかる（有田・江口2010）。一方ギーの使用が東部よりもさらに広い佐賀西部方言では、認識的条件を表すのにナイ以外に準体形式ト+断定辞ヤ+ギーが使用されることがあり、東部方言よりもギーが後接可能な品詞が広い。

佐賀方言のギーでもうひとつ重要な点は、タ形+ギーが事実的条件と反事実的条件にのみ現れるという点である。タ形+ナイ（バ）についても、予測的条件に一部現れるが、基本的には認識的条件に現れる。この方言では条件節のタ形が[+既定性]を標示していると言える。

表3 佐賀方言の条件形式の分布<sup>2</sup>

	予測的条件文	総称的条件文	認識的条件文	反事実的条件文	事実的条件文
佐賀東部方言	基本形+ギー	✓	✓		
	タ形+ギー			✓	✓
	基本形+ナイ（バ）	#	✓		
	タ形+ナイ（バ）	#	✓	✓	
佐賀西部方言	基本形+ギー	✓	✓	✓	✓
	タ形+ギー		✓	✓	✓
	ト+ヤ+ギー		✓		
	基本形（+ト）+ナイ		✓		
	タ形（+ト）+ナイ		✓		

### 3.2 準体形式の機能

日本語標準語のナラ形式による条件節にはナラの前に準体形式「ノ」が挿入される場合とされない場合があると言われている。

(5) もし、今部屋にいる（の）なら、あかりが灯っているはずだ。

(6) 明日雨が降った\*（の）なら、試合は絶対中止になるよ。

(5)ではノの挿入はあってもなくても成り立つが、(6)ではノが挿入されると不自然になる。有田(2004, 2007)では、ノが挿入できるのは、ナラが認識的条件文の条件節を導く場合に限られることを論じ、認識的条件文というカテゴリーを積極的に認めることを主張した。

目を方言に転じると、ナラ相当の条件節形式に準体形式が挿入されるかどうかは、必ずしも一様ではない。江口(2017)では、認識的条件文において準体形式が挿入されるかどうか（挿入が可能かどうか）が方言によって異なり、それぞれの方言における断定辞及び「のだ」相当の表現形式の分布状況と条件節における準体形式の挿入に相関があることが論じられている。断定辞が付けられる方言では「準体形式+ナラ」が用いられ、ノダ文に断定辞が付けられない方言では準体形式なしの「ナラ」が用いられるという。

江口(2017)に従うと、佐賀方言は準体形式なしの「ナラ」が用いられる方言ということになる。実際、佐賀東部方言のナラ形式に相当するナイ（バ）形式に標準語のノに相当する「ト」が挿入されずに認識的条件が表されることが調査でもわかっているが、同時に、トが挿入されても不自然というわけではなく、「トあり」が優先的に選ばれる場合も確かに観察される<sup>3</sup>。

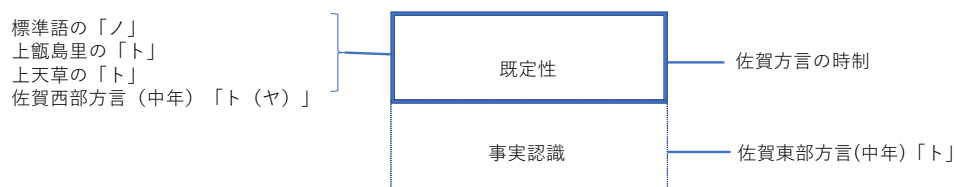
興味深いことに、ギーの使用域が広い佐賀西部方言では、発表者が調査した中年層女性の場合は、先述のように認識的条件節にはトヤギという形式も現れ、さらに、トナイのように

<sup>2</sup> ここで「✓」は問題なく使用されることを意味し、「#」は使用可能だが特別な含みがあること、そして、「✓」は特定のアスペクト形式を伴って使用されることをそれぞれ示している。

<sup>3</sup> カイガイキンムニ {ナンナイ/ナットナイ} エイゴバ モット ベンキョー シトカンバランヤッタ。(海外勤務になるんなら英語をもっと勉強しとけばよかった)この例の場合、海外勤務を命じる辞令が出た後の発話としては、トがある方がより自然であり、トがあることで、海外勤務になったという事実が確かにあることがはっきりするという。事実認識のプロセスを明示する機能をトが果たしているといえる。

トが挿入される傾向にある。両方言のト挿入に関する違いは、それぞれの条件表現における時制形式の現れ方の違いに関係していると考えられる。条件節のタ形が常に過去の事態を表す佐賀東部方言では、認識的条件節の**既定性は時制形式によってマークされる**ので、トは**事実認識のプロセスを明示的にする**必要がある場合に挿入される。一方、佐賀西部方言では、仮定条件全体に分布するギーが認識的条件節にも現れ、しかも、過去の事態を表すのにタ形と共にアスペクト形式トルも用いられる傾向にある<sup>4</sup>ことから、過去の認識的条件を表す場合にはト（ヤ）によって既定性が明示されると考えられる。佐賀方言に比べギーの使用域が狭い上甕島里、上天草では、ギーがタ形に後続せず、ナラ節のタ形は過去だけでなく未来の完了も表し、認識的条件だけでなく予測的条件も表す。つまり完全時制節ではない。ナラの前にトが挿入されることにより、既定的であることが確実になる。既定性と話し手の事実認識が準体形式の分布の鍵になっていることがわかる（有田 2021）。

図1 佐賀東部・西部方言、甕島里方言、標準語の準体形式の機能



#### 4. 後件のモダリティ制約の再検討

日本語標準語には、後件が直接的な働きかけの場合、条件形式トは現れることができず、バは前件が後件と同一の主語で非状態性述語をとる場合に出現しにくいという制約があり、タラにはこのような制約がないと言われている。

(7) 駅に {着くと/着けば/着いたら} 電話してください。

(8) 時間が {あれば/あったら} 電話してください。

一方、後件が直接的な働きかけであっても、標準語でタラが現れることができない場合がある(有田 2020)。たとえば、監督からいきなり主演に抜擢された女優が躊躇しているのに対し、さらにたたみかけるように言う次の例には、タラよりもナラの方が選ばれる。

(9) 鉄雄「で、主演は南で行くから」

(中略)

南「監督、私、…主演なんて」

鉄雄「俺はお前に惚れた、女としても女優としても」

南「え？」

鉄雄「断るなら女優をやめろ」 (有田 2020:157)

(9)の下線部をタラで表現すると、「断った場合は女優をやめろ」という、「ふつうの」条件付きの命令で、(9)にあるような緊迫感は感じられない。有田(2020)では、このような条件付き命令文において条件節は後件の命令が成立する単なる仮定的状況を設定しているので

<sup>4</sup> トナリー ドロボーノ ヒャータギニャー ウチモ ヨージン シトカンバ イカンニャー。(三井 2011:28) (隣に泥棒が入ったなら、気をつけておかないといけないな)

老年層の会話では、タ形+ギーで認識的条件が表され、トは挿入されていない。一方、中年層では、同じ文脈で、トが挿入されている。

トナリニ ハイッタトナイ、ウチモ キヲツケンニャ イカンタイネ

過去の事態がタ形ではなくアスペクト形式のトル形で表される場合、トヤギが接続する傾向にある。

モシカットトヤギ、ユーショータイナー。(もし、勝ったのなら、優勝だね)

はなく、むしろ、何を命令・依頼するか、その優先順位 (To-Do-List (Portner 2007)) そのものに影響を与える根拠となっていると特徴づけた。<sup>5</sup>

A タイプ…命令・依頼が成立する状況の設定「駅に着いたら電話してください」)

B タイプ…命令・依頼する優先順位 (To-Do-List) の根拠 (「断るなら女優をやめろ」)

A タイプの標準語のバの制約に類似した制約は九州方言にも観察される。佐賀東部方言、上甕島里方言では、ギーが現れにくく、佐世保方言ではギーの前接動態述語がタ形になり、ナラが広く使用される城島方言でもナラの前接述語がタ形になる。

佐賀東部方言

(10) ダイドコロバ \*ツカウギ / ツコータナイバ アトカタヅケセンバヨ

(11) ワカランギ キイテ

佐世保方言

(12) エキニ ツイタギンタ デンワ シンサイネ

(13) ワカラナイコトガ アルギ ユーテクダサイ

城島方言

(14) ダイドコロバ \*ツカウナラ / ツコータナラ アトカタヅケシトケ

(15) ソコニ オンナラ / \*オッタナラ ハヨ デテコンネ (千代島 2012)

後件が直接的な働きかけの A タイプの場合、前件は動作性述語の完了形あるいは状態性述語が現れる。同様の傾向は英語やスペイン語でも見られる<sup>6</sup>。標準語のバの制約やタラへの偏りは、一般性のある傾向として捉え直される。

一方、B タイプには、佐賀東部方言では、基本形 + ナイ (バ) あるいは基本形 + グライ + ナイ (バ) が現れ、佐賀西部方言では、基本形 (+ ト) + ナイ あるいは基本形 + ト + ヤ + ギ が現れる。A タイプとは違って完了形は現れない。英語やスペイン語では B タイプに意志や願望を表す述語が明示される。同じ条件付き働きかけ表現でも、A と B では異なる文法的特徴が見られる。

直接的働きかけ表現 (IMP とする) が条件文の後件に現れる場合には、(4) のように非明示的なモダルオペレータ NEC があると仮定する (Kaufmann and Schwager 2009)。後件の IMP が遂行されるのは、前件が真として成立する時点  $t$  (ただし、発話時以後) の世界の集合 ( $f$  とする) においてである。

(16)  $NEC_{f, g_1}[(\text{聞き手, 駅に着く})][IMP_{f', g_2}[\text{電話する}]] \dots \text{A タイプ}$

A タイプの意味は (16) のようになる。後件の IMP は、前件が真として成立する、つまり、動的事象であればその完了時、状態であればそれが存在する間に遂行される。前件の述語の時間的性質はここから導き出される。

B タイプは、前件に「隠れた聞き手の意向 (P とする)」<sup>7</sup>を仮定する。

(17)  $NEC_{f, g_1}[P(\text{聞き手, 断る})][IMP_{f', g_2p}[\text{女優をやめる}]] \dots \text{B タイプ}$

B タイプの (17) は、前件の聞き手の意向の有無が後件で何を命令あるいは依頼するかその優先順位の根拠 ( $g_{2p}$ ) となることを示している。「意向」は聞き手の発話時におけるものであり、

<sup>5</sup> 日本語の文法記述においては、条件節の事象時が主節の事象時よりも後のような時間的関係の場合にナラのみが使われるとされているが、上の例は、時間的には「断る→やめる」である。標準語のタラが現れない別のタイプの条件付き働きかけ文があるということになる。

<sup>6</sup> ギーの使用範囲が広い佐賀西部方言にこの制約が適用されない。

ダイドコロバ ツカウギ アトカタヅケセンバヨ。

<sup>7</sup> Condoravdi & Lauer (2016) の Anankastic Conditionals の分析を援用する。

後件の働きかけは、聞き手に「断る」意向があれば発話時において直ちに遂行される。

これら2つのタイプの条件付働きかけ文は、Aタイプは予測的条件文、Bタイプは認識的条件文に対応する。隠れたオペレータが時制によって導入されるとすると、認識的条件文と予測的条件文の違いは、前件に隠れたオペレータがあるかどうかによって捉え直すことができる。<sup>8</sup>

## 5. 課題と今後の展望

- ◆ 方言を研究対象にすることの難しさと面白さ
- ◆ 協同プロジェクトを推進することへの期待と不安

### 参考文献

- 有田節子(2007)『日本語条件文と時制節性』くろしお出版
- 有田節子(2017)「日本語の条件文分類と認識的条件文の位置づけ」有田節子編『日本語条件文の諸相』くろしお出版 pp.3-32.
- 有田節子(2020)「条件付き命令・依頼文—日本語条件文のモダリティ制約再考—」田窪行則・野田尚史編『データに基づく日本語のモダリティ研究』くろしお出版 pp.143-162.
- 有田節子(2021)「佐賀東部方言の条件節における準体形式「ト」の挿入—時制節性からみた条件表現の体系についての一考察—」筑紫日本語研究会(編)『筑紫語学論叢Ⅲ日本語の構造と変化』風間書房
- 有田節子・岩田美穂・江口正(2019)「甕島里方言の条件表現」窪蘭晴夫・木部暢子・高木千恵編『鹿児島県甕島方言からみる文法の諸相』くろしお出版 pp. 157-181.
- 有田節子・江口正(2010)「佐賀方言の条件節における時制の機能について」『日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集』223-230.
- 庵功雄(2017)『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
- 江口正(2017)「準体形式・断定辞の機能と条件文」有田節子編『日本語条件文の諸相』くろしお出版 33-58.
- 千代島のぞみ(2012)「城島方言—条件の「なら」について」福岡大学人文学部卒業論文
- 藤田勝良 (2003)『佐賀県のことば』日本のことばシリーズ 41 明治書院
- 前田直子 (2009)『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述—』くろしお出版.
- 益岡隆志(2013) 益岡隆志 (2013)『日本語構文意味論』くろしお出版.
- 三井はるみ (2011)「九州西北部方言の順接仮定条件形式「ギー」の用法と地理的分布」『國學院雑誌』112-12, 26-39.
- Cleo Condoravdi and Sven Lauer (2016) Anankastic conditionals are just conditionals. *Semantics and Pragmatics*, 9, pp.1-69.
- Funk, W. P. (1985) On a semantic typology of conditional sentences. *Folia Linguistica*, 19(3/4), pp.365-414.
- Kaufmann, Stefan and Magdalena Schwager (2009) A Unified Analysis of Conditional Imperatives. *Proceedings of SALT19*, pp.239-156.
- Kratzer, Angelika (1986) Conditionals. *Chicago Linguistics Society* 22-2, pp. 1-15.
- Portner, Paul (2007) Imperatives and modals. *Natural Language Semantics* 15, pp. 351-383.
- 付記: 本発表は JSPS 科研 19H01262 の助成を受けて行った研究成果の一部である。

---

<sup>8</sup> ただし、認識的条件文の前件に常に隠れた聞き手の意向があるわけではない。以下の文の前件に隠れているのは聞き手の意向というよりも認識的必然性である。

どうせ死ぬのなら、桜の木の下で死にたい。

# 方言と中央語の対照—共通点と相違点—

久保蘭愛 (Ai KUBOZONO)

愛知県立大学

## 1. はじめに：発表者の問題意識

日本語史研究は、アクセント研究などをはじめとして方言からの再構築も可能だが、文献に負うところが大きい。したがって残された文献の豊富な中央語が対象になることが多くなる。近世前期までは京阪の、近世後期以降は江戸の言葉が中央語であり、両者の対照はなされるものの、文献に乏しいそれ以外の方言史は不明な点が多い。

方言史の一端の解明が従来からの発表者の目的であり、その歴史を再構築する上で現代方言の様相を踏まえる必要がある。その際、現代と方言文献がどのように連続するのか、あるいは連続しないのか、連続しないとしたらなぜなのかを問う必要がある。

また、現代方言の調査を行なう中で、中央語と同じ素材を持ちつつ異なる発達をしたと思しい文法形式や、中央語とは異なる素材を用いているにも関わらず同じ方向に変化するものが見受けられる。こうした現象からは、日本語における共通のシステムや枠組みを考える手がかりを得られることもありうる。また現代方言の多様なバリエーションは、それぞれの方言における「ありえた変化」、「異なる歴史」の存在を示唆する。方言研究はそうした多様な日本語、相対化された日本語史を示しうる点でも重要である。さらに、方言の記述や調査に参加してみるとそれ自体も非常に有益であると思われる。

本発表では、九州方言、特に鹿児島方言（本土・甕島方言）や宮崎県椎葉村方言を対象にいくつかの現象を報告する。現代方言と中央語や共通語との対照を行なうことで、共通点（同じ変化）と相違点（異なる発達）、つまり一致とズレの観察を行なう。また現代方言と方言文献との対照から、文献から得られるデータへの再考を行ないたい。

なお、ここで挙げる例は①18世紀前半の鹿児島方言を反映するゴンザのロシア資料、②明治-昭和初期生まれの鹿児島方言話者の談話（方言ライブラリ）、③発表者の調査（合同調査含む）で得たデータ、④中央語文献からの用例である<sup>1</sup>。

## 2. 現代方言と中央語・共通語との共通点と差異

### 2.1. 異なる素材、同じ方向への変化：準体助詞の定着過程

別の形式を用いながら、中央語と同じような発達をしているところは多く見いだせる。

---

<sup>1</sup> ロシア資料：日本語訳は江口(2009)によった。日本語部分は私にアルファベットに置き換えた。  
合同調査：国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」、  
椎葉民俗芸能博物館研究事業「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」（山本友美氏と  
合同調査）による。どの資料からの用例も、挙例の際は【 】内に出典等を示す。

一例として鹿児島本土方言の準体助詞の定着について見てみたい。

『方言文法全国地図』（以下 GAJ）16・18 図を見ると、九州方言は準体助詞トを持つ地域が広く、多くはモノタイプだけでなくコトタイプも標示が必要である<sup>2</sup>。準体助詞の定着は中央語史や諸方言でコトタイプが遅いと指摘され（青木 2016, 坂井 2015, 野間 2013 等），坂井(2019b)ではモノタイプへの準体助詞の十分な定着を経てコトタイプへという仮説が示される。現代で既に準体助詞トがほぼ必須の鹿児島方言でも同様の変化が生じたと考えられる。ゴンザのロシア資料ではトが多く見られるが（彦坂 2006），ゼロ準体はコトタイプにしか見いだせない。

- (1) a ロシア語文：сливы на короткихъ（西洋李は短い（茎にぶらさがっている））  
ゴンザ訳：momonanda mickakate（桃等は 短かとに）【ゴンザ世界 13 章】
- b ロシア語訳：мѣшоки и плетенки годятся переносит вещи.（袋と籠は物を持ち運ぶのに役に立つ）  
ゴンザ：fuk'ronando teegonando ir' motenawoswi mononando（袋等 てご等 要る 持ち直すに 物等）【ゴンザ世界 71 章】

近現代ではトが必須になり、ゼロ準体はトイウを含む環境にのみに許容される。

- (2) a ババジャツツ φガ ワカランカチ ユタチュドン  
‘「婆だというのが分からないか」と言ったそうだが’【ライブラリ長島】
- b ヨバナシツツ φガ ハヤイオッタデネー  
‘「夜話というのがはやっていたからね’【ライブラリ阿久根】

さらに現代の 70 代では個人差があるが、その環境でもゼロ準体が許容されづらくなる。

- (3) a 「昔は方言札というのがあった」  
A 氏：昔は方言札 { チュートガ / △チュφガ / △ツφガ } あった  
B 氏：昔は方言札 { チュートガ / チュφガ / ツφガ } あった
- b 「喧嘩をしたというのは本当か」  
A 氏：喧嘩を { シタチュートワ / \*シタチュφワ / \*シタツφワ } 本当か  
B 氏：喧嘩を { シタチュエター / シタツチュφワ / シタツφワ } 本当か  
【鹿児島県薩摩川内市・調査】

モノからコトへの定着は通方言的に<sup>3</sup>，トイウへのゼロ準体の偏りは江戸語と共通しており（原口 1978, 坂井 2019a），異なる素材（ノとト）をもとにしてもそれらと同じ流れの中に位置付けられる。

<sup>2</sup> 用言のみあるいは用言＋準体助詞で名詞句として振る舞うものを準体と呼ぶ。準体のタイプをモノとコトにわけると。モノ：割れたのを捨てなさい（割れた皿）／コト：大事な花瓶が割れたのを知らなかった（割れたという事柄）。また、準体助詞がないものを特にゼロ準体と呼ぶ。

<sup>3</sup> ロシア資料でコトタイプのゼロ準体しか見いだせないのは、現時点では元々モノ指示であることに起因すると考えている。ただしモノタイプのゼロ準体が偶然見られなかった可能性もある。



## 2.2. 同じ素材，異なる変化：外部からの観察・他者の感情感覚の表示

中央語と同じ素材や句の形成法を用いながら，別の方向に発達したものも見てみよう。例として，椎葉村方言の他者の感情感覚の表し方，甌島里方言の形容詞重複形を挙げる。

九州方言の複数地域で形容詞語幹＋シャシトル/セーシトルの形で他者の感情感覚や評価を表すことができる。この形は形容詞語幹＋サ＋ニ＋シトルの形に由来すると考えられ（以下サニシトル）<sup>4</sup>，九州西部を中心に報告がある<sup>5</sup>。多くの方言ではサニシトルという述語形での記述が多いが，本方言と甌島里方言ではこれに加えて形容詞語幹＋サニの形で従属節に生起可能で原因理由を表す。以下に椎葉村方言の例を挙げる。

- (4) a センセイオ オゾセーシチョール（太郎は先生を怖がっている）  
b オゾセー コントジャガ（太郎は怖いから来ないんだよ）【椎葉村鹿野遊・調査】

松橋方言を記述した村上(2004)は，感情感覚形容詞＋サニシトルは共通語ガル相当で，属性形容詞の場合は主体による対象の評価を話し手が目撃していることを表すという。

本方言のサニシトルも共通語ガルと類似の意味を持つ。サニもサニシトルも基本的には話し手について述べることはできず「相手から見て自分がどう感じているように見えるか」という文脈でしか用いられない<sup>6</sup>。したがって，他者の感情感覚等を，話し手が外からの観察によって把握していることを表す形式とまとめることができよう。

- (5) a #オゾセー イカン（#私は怖いから行かない）【鹿野遊地区・調査】  
b ソギャー イタシャーシトッタカ？（私はそんなに痛がっていたか？）【尾向地区・調査】

さて共通語のガルと比較すると，意味的に共通するところはあるものの，松橋方言と同様に属性形容詞にも接続して他者の評価を表すことができる点が異なる。

- (6) センベীগ カタセーシトル（あの人は煎餅を固そうにしている/固がっている）【椎葉村梅尾・調査】 cf. 固そうにしている・??固がっている

また外から観察結果を表す点で共通語ソーニとも類似するが，ソーニは原因理由に偏らないため重なりつつもズレが見られる(cf. おいしそうに食べる，\*固そうに食べない)。

他者の感情・感覚を含めて，外部からの観察結果を表す場合に，形容詞の言い切り形で表さず，別の形をとるという大きな枠組みは共通語や諸方言とも一致するが，それをどう表すか，形式やその広がりが方言によって異なると言えよう。

ところでサニは中央語でも使用された形式だが（青木 2005），人称制限はなさそう

<sup>4</sup> この形式がサニに由来することは形態音韻論的な規則から導かれ，他方言でもサニに由来するという記述がある（森他編 2013）。なお話者によってはサニ・サニシトルよりもフーを好む。

<sup>5</sup> 使用の報告は，熊本県益城町・熊本市・球磨郡水上村（村上 2004），長崎県南松浦郡新上五島町方言（高橋 2020），佐賀県佐賀市・長崎県佐世保市・熊本県天草郡龍ヶ岳町（工藤編 2002），鹿児島県甌島里方言（森他編 2013）等にある。

<sup>6</sup> ただし村上(2004)では一部の話者・一部の用法において 1 人称での使用が可能であるという。高橋(2020)では 1 人称文では使用不可とされる。

で、現代共通語でも1人称文で使用可能である（少なくとも非文ではない）<sup>7</sup>。

- (7) a 甲斐ない命の惜しさに (voxisani) 衆徒を頼みに来たと、仰せられたれば

【天草版平家巻二第二】

- b (教え手) せうやうがなさに、さやうにしたが【虎明本狂言・ひつしき聲】

- (8) あまりの辛さに泣きたくなりました【作例】

形容詞語幹+サ+ニという中央語でも見られる素材をもとに、外からの観察による把握を表す形式の発達を可能にしたのは、九州西部でサニ+シトルという形をとりうることに要因と思われる。共通語のテイルは、観察に基づく情報であることを表すエビデンシャルであると指摘される（定延 2006）。九州方言のシトルも同様のことが言えるならば、形容詞語幹+サニ+シトルの共起がしばしば生じることで、形容詞語幹+サニ自体に外からの観察と把握という機能が焼き付けられた可能性が考えられる。

他方で、中央語では名詞化接辞サによって形容詞の人称制限をとりはらったが、サニシトルの形では発達させなかったために人称制限が生じなかったものと思われる。

### 2.3. 同じ句の形成方法、異なる変化：形容詞の重複形

甕島里方言では、動詞言い切り形の重複によって後件時の付帯状況を表す（森他編 2013:岩田美穂氏執筆部分）。

- (9) チャバ ノムノム カタローカ（茶を飲みながら話そうか）【甕島里・調査】

この方言ではナガラよりも重複形で付帯状況を表すことが一般的であるという。動詞の場合は動作動詞から作られることが多く、変化動詞は多数の出来事としてならわずかに重複可能であり、状態動詞はオルのみ重複可能との回答を得た。さらに、本方言ではこれに加えて形容詞言い切り形の重複も存在し、後件の動作が行なわれるときの主体の感情感覚を表す。典型的には感情感覚形容詞から作られる（ただし感情感覚形容詞であれば必ず可能というわけではない）が、一部の属性形容詞でも重複可能である。

- (10) a イタカイタカ シゴトバ シター（腰が痛いながらも仕事をした）

- b トーカトーカ カエッテキモイター（遠いなと思いながら帰ってきました）

【甕島里・調査】

なぜこの方言で形容詞重複が可能なのだろうか。動詞言い切り形の重複は、中央語では副詞化し生産性を失ったが（橋本 1959, 青木 2005），GAJ41 図を見ると本方言も含めて西日本では言い切り形の重複がまとまって見られる。中国地方等は幼児語とされる地点もあるが<sup>8</sup>，本方言ではそうした位相的な制限はない。このような動詞重複の生産性の高さという個別の事情から、独自に形容詞重複を生み出したものと想定される<sup>9</sup>。

<sup>7</sup> 中央語の用例収集にあたり、国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』（データバージョン 2020.03）を使用した。

<sup>8</sup> 島根および長崎県の話者の回答（『方言文法全国地図解説 1』及びデータ集による）。

<sup>9</sup> 他方でどういふ形容詞から重複が可能かということを考えたときに「痛い痛い」と足を引きずっている」のような引用表現の「並示列的構造」（藤田 2000:75）の影響もあるかもしれない。共

### 3. 方言文献と現代方言のズレ

#### 3.1. 属格助詞ガの分布

最後に方言文献と現代方言とのズレを見よう。中央語では属格助詞にガとノの2つがある。上代語ガは上接語が代名詞や固有名詞に偏り、ノは広く名詞をとれることが知られる（野村 1993）が、九州方言の属格ガノも似た分布を示すことがある<sup>10</sup>。以下に明治-昭和初期生まれの鹿児島方言話者の談話（方言ライブラリ）から得られた属格ガノの分布を示す（表は待遇的にニュートラル以下の例。-は例が見られないもの）。

表 1 方言ライブラリ（薩摩北部）の属格ガノの分布

	1 人称	2 人称	3 人称	親族固有	人間	動物	無生物
長島	ガ/-	-/-	-/ノ	ガ/-	-/ノ	-/ノ	-/ノ
阿久根	ガ/-	ガ/-	ガ/-	ガ/ノ	-/ノ	-/-	-/ノ

他方、ゴンザのロシア資料にも属格ガノが見られるが、現代方言に比してガの領域が極端に狭く、1 人称（単・複数）、疑問詞「誰」だけを上接語に取り、それ以外はノが用いられることが指摘される（江口 1990）。仮に中央語と同様に 18 世紀以前はガの領域が代名詞等にも広がっていたのだとしたら、次のような歴史を想定することになる。

- (11)      18 世紀以前      18 世紀前半      近現代以降  
             広?      >      狭      >      広

18 世紀以前のまとまった方言文献がないため最終的な判断は難しいが、資料性によってガの領域が狭く見える可能性も検討してみてもよい。当然文献から得られるデータは重視すべきだが、現代方言の様相から文献に現れる現象を再考するきっかけを得られる。

### 4. おわりに

ここまで中央語史とそれにつながる共通語と同じような歴史が想定されるパターンと、異なる変化・ズレが見られるものを見てきた。大きな枠組みは共通していても、当然各方言における個別の事情・体系のために別の発達をしている。

もう一つは文献と方言とのズレである。文献から想定される歴史に対して、現代方言の調査から別の解釈を再考するきっかけを与えてくれるものと思われる。

歴史と方言との対照、共通語や諸方言との対照は、個人の研究でも可能だが、分野間の協力によってより研究が深まるものと思われる。合同調査や方言の記述に参加してみ、調査方法をはじめとして、母方言や中央語史の再考等得るところが大であった。各

通語で独話の形容詞反復が可能なのは、体感度や身体性が高いと解釈される形容詞であり、タラ条件文の後件に現れるかどうかでテスト可能とされる（大江 2019）。調査が不十分だが、本方言でも(ii)のような条件節の後件に来る形容詞がこの重複形を作りうる可能性がある。

(ii) a    タンニンニ ナレバ オトロイカドー（あの先生が担任になったら怖いよ）

      b    ソッチカラ イケバ トーカドー（そっちから行ったら遠いよ）【甕島里・調査】

<sup>10</sup> 上接語の尊卑によるガノの使い分けも存在する。

分野からの相互協力や知見の援用は以前からあるが、その重要性を改めて強調したい。

【使用テキスト】方言ライブラリ…『50-1 長島町方言』、『6-1 阿久根町方言』（鹿児島県立図書館蔵）／ゴンザのロシア資料…『世界図絵』（鹿児島県立図書館マイクロフィルム）・『日本語会話入門』（九州大学図書館コピー）原本東洋写本研究蔵／『竹取 物語』…新編古典文学全集／『天草版平家物語』…近藤政美・池村奈美・濱千代いづみ共編『天草版平家物語語彙用例総索引 1』勉誠出版

#### 【参考文献】

- 青木博史 (2005) 『語形成から見た日本語文法史』 ひつじ書房
- 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』 ひつじ書房
- 江口泰生 (1990) 「一八世紀初頭の薩隅方言における「ノ」と「ガ」の用法」『語文研究』 69
- 江口泰生 (2009) 『古辞書・ロシア資料による日本語形態音韻の研究』 科学研究費成果報告書
- 大江元貴 (2019) 「形容詞基本形反復文の談話的・統語的特徴」『日本語の研究』 15-2
- 工藤真由美編 (2002) 『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』 平成 13 年度科研成果報告書 No.1
- 窪蘭晴夫監修, 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦編『甕島里方言記述文法書』 国立国語研究所 国立国語研究所編 (1989) 『方言文法全国地図』 大蔵省印刷局
- 坂井美日 (2015) 「上方語における準体の歴史的変化」『日本語の研究』 11-3
- 坂井美日(2019a) 「上方語と江戸語の準体の変化」 矢島正浩・金澤裕之編『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』 笠間書院
- 坂井美日 (2019b) 「南琉球宮古語における準体の変化に関する考察」『方言の研究』 5
- 定延利之 (2006) 「心内情報の帰属と管理—現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について—」 中川正之・定延利之『言語に表れる「世間」と「世界」』 くろしお出版
- 高橋裕一 (2020) 「長崎県南松浦郡新上五島町有川方言の形容詞について」 長崎大学多文化社会学部 原田ゼミ 2019 年度卒業論文
- 野間純平 (2013) 「高知県四万十市西土佐方言における準体助詞」『阪大社会言語学研究ノート』 11
- 野村剛史 (1993) 「上代語のノとガについて（上）」『国語国文』 62-2
- 橋本四郎 (1959) 「動詞の重複形」『国語国文』 28-8
- 原口裕 (1978) 「連体形準体法の実態—近世後期資料の場合—」『春日和男教授退官記念語文論叢』 桜楓社
- 彦坂佳宣 (2006) 「準体助詞の全国分布とその成立経緯」『日本語の研究』 2-4
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』 和泉書院
- 村上智美 (2004) 「熊本方言における「寂ッシャシトル, 高ッシャシトル」という形式について」 工藤真由美編(2004) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を超えて—』 ひつじ書房